

中川絹糸

純国産の絹紡糸復活

ファッション用途需要高く



光沢感と紡績糸ならではのふくらみ、柔らかさが特徴だ

の蓄積・伝承ができた」という。生産設備はほとんどが自社で改造した。中古機械の購入の

際には、従業員が泊り込みで工場に出向き、機械の解体、組み立てまで全て自力で行うという徹底ぶりだ。生産に対する知識を深め、技術的なレベルを高めている。

今後は海外への販売も拡大したいと考えた。「世界的に見れば、まだまだ需要は拡大しており、可能性がある」と日本の絹の良さを国内外に発信していく。

滋賀県長浜市で絹紡績を行う中川絹糸（中川嘉隆社長）は、原料である蚕の繭から純国産の絹紡糸生産をスタートする。国産絹紡糸の生産は、03年にシナノケンシが撤退して以来、13年ぶりの復活となる。

「ステューディオス」レディース路面店など3店をオープンするとともに、直営越境ECサイトも立ち上げる。ステューディオス初のレディース路面店は8月12日、渋谷パルコ店移設の形で神南店1階に開設する。2階をメンズとし、グローバル旗艦店の位置づけとなる。渋谷パルコ店は海外客比率35%と高かったため、神南店で海外客を取り込む。

8月31日には今春立ち上げたレディース新業態「ステューディオスシテイ」をルクアイーレへ、9月はUTを東京都内に outlet する。今後UTは複合の大型売り場を志向せず、レディース、メンズで店を分け、約132平方メートルの小型店で高効率な運営をめざす。

越境ECサイトは中国、台湾、香港向けに言語対応して8月1日に開始する。

糸の機械生産に成功、意匠性の高い特殊糸の生産に特化し、現在でも主力商品として欧州のブランドなどに採用されている。

絹紡糸は、絹ならではの光沢はもちろん、膨らみやかさ高性があり、洋服に適している。しかし、海外産品は価格や品質の変動が大きく、国内外の有力ブランドなどから安定した品質の絹紡糸へのニーズが高まっている。

そこで国産絹紡糸復活への取り組みをスタート。中小企業庁のもののづくり補助金を活用し、機械メーカーとも連携し、今年に入って絹紡糸生産に必要なガス焼き工程の技術確立した。番手は毛番手で60番双糸と120番双糸。原料の安定調達に課題は残るものの、今年の益明けごろから本格生産に取り組み予定だ。

日本ではいったん途絶えてしまった絹紡糸生産だが、復活の背景には同社の持つ高い技術力がある。従業員15人は全て正社員。平均年齢は35・4歳と若い。技術は経験でしか得られないものも多い。正社員採用にこだわったことで、技術や経験